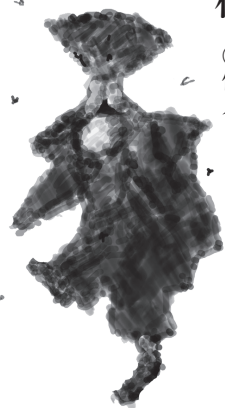


主催… 県立神奈川近代文学館 / (公財) 神奈川文学振興会
後援… 月刊『望星』

小島ゆかり ◎ 歌人

辻原登 ◎ 作家

長谷川權 ◎ 俳人



半歌仙 『太郎冠者の巻』

一月十四日に神奈川近代文学館で開かれた「かなぶん連句会」は、三人の選者が作った句に続く句を参加者が考え、半歌仙の連句を完成させる連句創作の催し。参加者が一体となって楽しんだ当日の様様をレポートする。

受け継がれてきた日本語と連句の魅力

【初表・発句】

長谷川 恒例の連句会にお越しいただき、ありがとうございます。

早速ですが、表六句の解説から始めます。今回の発句は当初、「初春や君が得意の太郎冠者」でしたが、一気に春の花の句として勢いづけたくなり、「花と舞へ君が得意の太郎冠者」と直しました。読んで字のごとく、狂言の練習をしている人たちの正月の初稽古の姿を詠んだものです。

【脇】

小島 今年もこの会で皆さんと会えて嬉しく思います。長谷川さんの発句には太郎冠者とあり、狂言独特の「ややこしや」「またれ、またれ」といった言い方が心に響いてきました。脇の句では、これから新しい春を迎える雪解けのしづくが溶けていく様を、「たたりたらあり」と狂言の太郎冠者が言うように表してみました。「雪解のしづくたたりたらあり」。

【第三】

辻原 第三は「上方に春風を売る噺家あて」です。小

半歌仙『太郎冠者の巻』

【初折の表】

発句 花と舞へ君が得意の太郎冠者 權
脇 雪解のしづくたたりたらあり ゆかり
第三 上方に春風を売る噺家あて 登
四 何もないから何もかもある 權
五 三日月を喰はんと屋根にのぼる猫 ゆかり
六 ジャツカルの日フランスは秋 登

【初折の裏】

初句 総統選民の心へ鷹渡る 庸子
二 二人で分けるバナナ一本 乃里子
三 猿山につひに現はるメスのボス 緑式部
四 株価は今や絶頂にあり アラン
五 夏休み終わりが無いと思つた 球
六 琵琶湖にかかる大いなる虹 遊子
七 地酒選る自転車旅の若き人 悠樹
八 かじかむ指でミサンガをあむ 町子
九 スーパーの柿裏返す占ひ師 美恵子
十 毛虫のように強く生きたい 響己
十一 花の宿ゆかりのひとと巻く歌仙 木屑
折端 春らんまんの戦なき空 珠江

島さんの脇の句の雪解けから、桂枝雀の創作落語「春風屋」が思い浮かびました。「春風屋」には、春風を売りに来る男が出てきます。「春風屋、春風屋、春風いらんかね」と。それから「おい春風屋、春風をくれ」「ひと吹き、十銭」と、客とのやりとりが始まります。そして、「初春だから梅の香りをくれ」「梅の香りは十文」「えらい高いな」などとやるわけです。春風屋は、夏になると夕立を売り、秋になれば月を売りに来ます。夕立には稲妻をつけ、月には雲やうさぎをつけて売るので。とても面白い話です。

【四】

長谷川 第四は「何もないから何もかもある」。春風屋を褒めたたえる感じで詠みました。何もないのだけれど人の生き方次第で、その中をいろいろなもので満たすことができる。日本人の生活や風習、気の持ち方などをイメージしていただいてもいい。

【五】

小島 「何もないから……」の句が長谷川さんから届いた時は、正直困ったなと思いました。こんな風に出来上がっている世界があり、哲学や禅のようなことを考えている人がいたら、どう対応したらいいでしょうか。そこで私は野生の世界に目を向けました(笑)。